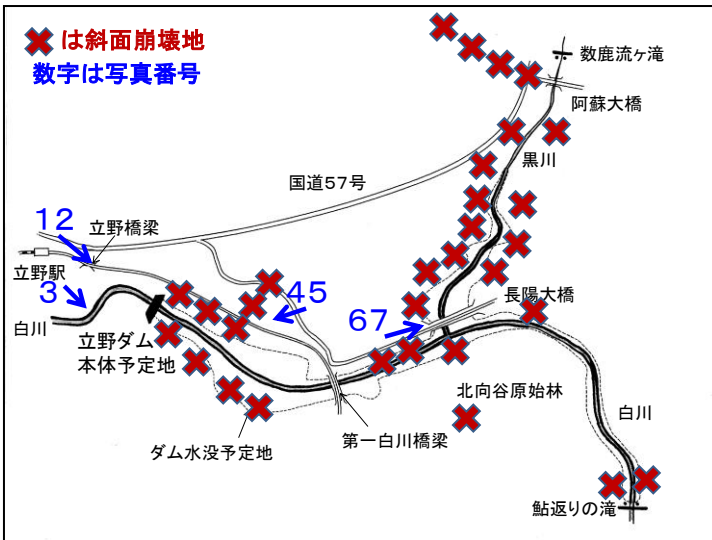


# 熊本地震直後の立野ダム予定地周辺現地調査報告書(速報)

2016年4月24日

立野ダムによらない自然と生活を守る会



今回の熊本地震（4月14日前震、4月16日本震）直後の4月19日、立野ダム予定地周辺の立野峡谷を現地調査した。

立野ダムが建設されようとしている立野峡谷は、阿蘇外輪山の唯一の切れ目である。外輪山が立野で切れた理由は、断層のはたらきで外輪山が落ち込んだからである。その後、中央火口丘からの溶岩で埋もれては、浸食のはたらきで削られることを繰り返して、立野峡谷は形成された。今回の地震で立野峡谷では、大規模な土砂崩れが多数発生した。



## 1. 立野ダム本体建設予定地

写真1は、大規模な斜面崩壊があった阿蘇大橋の約2.5km下流の立野ダム本体予定地を、下流側（南阿蘇鉄道の立野橋梁）から見た写真である。写真中央の工事用仮橋付近にダム本体が建設予定である。そのすぐ上流まで両岸が崩れ、工事用道路や現場事務所、工事車両や各種工事用機材なども崩落した土砂の中に埋まっている。

←写真1



写真2は、同位置からのアップである。両岸の工事用仮設道路や、奥の1本目の工事用仮橋も右岸側（写真では左側）が崩壊した土砂で埋まり、白川の流れの一部がせき止められ、左岸側の仮排水路トンネル（工事中）に流れ込んでいる。

国土交通省は「ダム予定地の岩盤は十分な強度がある」と主張してきた。もしダム完成後にこの地震が起きているとしたら、ダム本体の両岸の地盤が崩れていたわけであり、ダムの施設が損壊していた恐れもある。

←写真2



黒川発電所側から見た、仮排水路トンネルの出口である。斜面崩壊により、トンネルも破損している。仮排水路トンネルの入口付近の白川の一部がせき止められ、白川の流量の一部が工事中の仮排水路トンネルを通過して流れ出ている。工事用車両も多数埋まっている。手前の屋根は黒川発電所である。

黒川発電所周辺も斜面崩壊のために車は全く通れず、発電所の導水管も上のほうが壊れ、発電を中止している。

←写真3



## 2. 横ずれ断層を確認

立野ダム本体予定地約 300m 上流の 1 本目の工事用仮橋周辺は大規模な斜面崩壊を起こし、ダム工事現場に近づけない状態である。その箇所付近の長陽大橋に向かう道路に、立野ダム本体予定地周辺の向かう断層を確認した。50cm ほど横にずれている。

国土交通省は「文献調査や地形調査、地表地質踏査などの結果を総合的に勘案して、ダム建設を行う上で特に考慮する活断層は存在しないと判断しています」と主張してきた。

### ←写真4

道路上の断層を延長すると、立野ダム本体予定地約 200m 上流の仮排水路トンネル入り口付近に向かっている。

国土交通省は「ダムサイトに一番近い北向山断層は、布田川・日奈久断層帯の中で最も北東部に位置する断層ですが、その走向性は立野ダム建設予定地近傍へ向かわないことを確認しています」と主張してきた。しかし地震後、布田川断層帯は阿蘇カルデラ内まで延びている点や、断層に続く新たな断層が存在していたことも多く報道されている。

### ←写真5



## 3. ダム予定地周辺の地すべり

「立野ダム代替道路」である長陽大橋に向かう道路は、谷側の崖が大崩落して、道路も崩落寸前である。白川・黒川合流点付近では、北向谷原始林の下部も一部崩壊している。長陽大橋の向こう側の道路も崩壊している。立野ダムが完成していたら、ダム満水時はこの道路の高さの半分くらいまで水没する。

### ←写真6

長陽大橋の高さにあった道路が、斜面崩壊のために落ち込み、2m ほどの段差ができています。この斜面崩壊を止めて、道路をかさ上げすることは不可能だと思われる。

国土交通省は「立野ダム貯水池周辺について、地形判読を行った結果、洪水調節により流水を貯留する際の最高水位であるサーチャージ水位 (EL.276m) 以下に水没し、かつ凹状の緩斜面地形などの地すべりの存在を示すような地形の分布は認められませんでした」と主張してきた。

### ←写真7



## 4. まとめ

国土交通省はこれまで「立野ダム予定地の岩盤は十分な強度がある」「立野ダム建設を行う上で特に考慮する活断層は存在しない」「地すべりは起こらない」等と主張してきたが、今回の地震でそのすべてが否定されたことになる。立野ダムは流域に危険をもたらすものであり、国土交通省は建設を即時に中止すべきである。